

# 戦争の犠牲

小 高 睦

東中野一丁目

昭和十七年秋、静岡の連隊にいた兄は、慌ただしい外出許可に依り我が家に帰った。くわしい事は分らないが、二、三日うちに南方に行かされるようだといいことを言っていた。身内の集まれる人が呼ばれ、本家の庭で日の丸の旗を持って集合写真をとった。その時私は五年生であった。

学校に使いが来て、走って家に帰り参加した。それが兄の最後の写真になった。兄嫁は三人目の子供を宿していた。子供や妻、又両親、未だ見ぬ子供のことばかりであったのだろう、兄は戦地にむかう夜行列車の窓から、東海道線の鳴田の踏切りに手紙を落としていった。部厚い封筒の表に、この手紙を拾った人は、踏切りの近くにある長屋という私の従兄弟の所に届けてください、と書いてあった。その中に生れてくる子供が男の子だったら、女の子だったらと、二つの名前が書いてあった。女の子が生れ、兄の書いていった名前、孝江と付けられた。

昭和十八年八月二五、六日頃だったか、夏休みの宿題のグライターの模型を作っていると、役場の人が三人で尋ねて来た。

応対に出た母に、誠にお気の毒ですがと、兄の戦死の公報を差し出した。

それに依ると、兄はガタルカナル島にて右胸部盲貫銃創により戦死ということであった。暫くたって、何も入っていないお骨箱が届き、秋に何人かの戦死者と学校の校庭で合同公葬が行こなわれた。この少し前に二番目の兄も海軍に召集され横須賀に入隊した。

この頃から、働き者だった母の体調がぐずれ出し、小さな身体が更に小さく細くなってしまった。戦争も日増しに激しくなり、食料も困難になり、静岡の田舎の小さな村も、編隊を離れたB29の焼夷弾攻撃で村の半分は灰になってしまった。この頃私達学生は学徒動員で、村の工場で午前中は勉強、午後は工場で仕事という生活をしていた。すっかり身体を悪くして病人になつてしまった母は、毎日兄の夢を見、兄が「弟は俺が必ず守るから大丈夫だ、おふくろ」と言つたと言つたり、海の方から兄が「戸を開けてくれ。帰って来たから戸を開けてくれ」と叫

んだと言ったり、兄の事ばかり言いつづけていた。

頼りにしていた長男だし、学校の成績も抜群だった兄への両親の期待が破れて、大きなショックだっただろうと思う。

二〇年八月十五日の終戦がすぎ、次兄の帰るのも待てずに母は他界してしまった。肝臓癌であった。

この戦争のために父や子供又兄弟を失った人、その為に不幸になった人はどれ程いるであろう。この戦争がなんの為になったのか、私は戦争ほど人を悲しませ不幸にするものはないと思います。

私は誰にもみとられず、「お国のために」と異国の土となった兄を、折りがあつたらガダルカナルの地に行き、偲びたいと思います。

